



城

審判部第17部門 深草 祐一

びっちゅうたかまつじょう
第二十二回 備中高松城
～羽柴秀吉の水攻め～

びっちゅうたかまつじょう はしほひよし
備中高松城といえば、羽柴秀吉が大規模な水攻めを行っ
た城として有名です。そのため局地的な戦術面に関心が
向きがちですが、高松城攻防戦は、対毛利戦略における
重要な局面でした。今回は、この高松城を中心とした戦
いの全体的な概要をご紹介します。

織田 vs 毛利

天正5年に織田信長から山陽方面の攻略を任された羽柴
秀吉は、姫路城を拠点として、播磨とその周辺の経略を
進めていました。途中、背後で三木城の別所長治、伊丹
城(有岡城)の荒木村重が相次いで毛利に通じ織田に叛旗
を翻す事態に悩まされますが、天正8年初めにこれらの乱
が平定されると、毛利の支援を受けて抵抗を続けていた
石山本願寺も退去。後背の憂いが無くなった秀吉軍は、
消極的な毛利を見限って織田方に付いた宇喜多直家と連
携しながら、但馬、因幡、美作に攻め込み、天正9年には
山陰の拠点鳥取城を陥落させます(第18回「鳥取城」参照)。
そして、天正10年初めには、大軍を率いて宇喜多の本拠・
備前岡山へ進出。病死した宇喜多直家の遺児・八郎
(宇喜多秀家)を養子に迎えたい旨を表明しつつ宇喜多勢
を実質配下に収め、いよいよ毛利の勢力圏深く侵攻する
準備を整えました。その頃、東国では、織田・徳川連合
軍が一斉に武田領に侵攻。ついに強敵武田を滅ぼします。
信長は甲斐へ赴いて旧武田領の仕置きを行い、4月に安土
に帰還しています。全ては信長の思惑どおりに進んでい
ると言ってもいい状況でした。

一方、毛利方は、宇喜多が寝返った今、織田勢の備中
侵攻は必定と考え、高松城を中心とする7つの城の防備体
制を固めていました。そして、各城主を招いて刀を与え
激励します。この時、小早川隆景が必ず秀吉の降誘があ

る旨を語ったのに対して、高松城主の清水宗治は、秀吉
の大軍に勝てるとは思われないが、この刀で戦い、城を
枕に討ち死にする際にはこの刀で腹を切ると、決意のほ
どを述べたといい、名将清水宗治が、恩を受けた小
早川隆景に忠誠を誓いながらも現実を見据えた冷静な判
断をしていたことを示す逸話として伝わっています。し
かしながら、毛利の戦略方針は、天下を望まず、中国地
方の覇者としての現状維持にあったと思われ、織田との
本格的決戦を極力避けていた節があります。ここに清水
宗治の悲劇がありました。

高松城水攻め

秀吉は、まず清水宗治に備中、備後を与えとの誓紙
を送って寝返りを勧めましたが、宗治は丁重にこれを断
ります。そこで秀吉は宇喜多勢を含めた3万近い軍勢を
もって備中へ侵攻。国境7城に対して攻撃を開始しました。
そして、総大将秀吉は7城の中心となる高松城を包圍して
本陣を張りました。

さて、この高松城という城は、一般にイメージされる
ような、高台に石垣を積み上げた城とは違い、深田や大
沼に囲まれた低湿地にあって、城へは辛うじて行き違
うことのできる畦道のような細い道があるだけであつた
といえます。いちど泥にはまると体が沈んで動けなくな
ってしまうという、まさに天然の要害の地に築かれた非常
に攻めにくい城でした。秀吉は宇喜多勢に命じて激しく
攻撃させますが、約5千の城兵が一丸となって抵抗し、容
易に攻め破ることができません。このままでは、鳥取城
と同じように兵糧攻めの展開も考えられますが、今回こ
そは毛利の本格的援軍が予想され、毛利の大軍勢が来ぬ
うちに落城させたい秀吉は、城の立地を逆手に取り、折



備中高松城水攻めの様子

からの梅雨も利用して、水攻めにすることを決断したのでした。

秀吉は、ただちに足守川の水を城の周りに引き入れるための堤防造りを命じました。この時、土俵一俵運んでくれば銭百文及び米一升と引き換えると触れまわったため、近隣から百姓らが殺到し、昼夜兼行の工事の末、わずか12日間で長大な堤防を完成させたといえます。こうして完成した堤防は、幅12間(約21m)、高さ4間(約7m)、そして長さは約2.7kmであったといい(近年、もっと小規模だったとする説が有力)、現在の高松城本丸最高点が標高7.7mであるのに対して蛙が鼻築堤跡の最高点が標高8.8mということですから、後世の変化を考慮しても、城のほとんどが水没し、床下又は床上浸水の状態だったと考えられます。兵糧米は水に浸かり、一般の兵は木に登るしかなかったことでしょう。

毛利の援軍としてようやく到着した吉川元春、小早川隆景らは、すっかり水没した高松城を見て驚きます。しかし、周囲には秀吉の大軍が陣を構えており、容易には手を出せません(到着した軍勢は1万程度だったとの説あり)。周囲の城の奪い合いで小規模な戦闘が行われるものの、本格的な戦いにはならず、睨み合いが続きました。そこで、毛利方は安国寺恵瓊を使者として和議を申し込んできました。しかし、秀吉は領土の割譲と城主清水

宗治の切腹という2条件を譲らず、交渉は難航します。そして、秀吉は信長へ戦線が膠着したことを報告するとともに来援を要請。これを決戦の好機とみた信長は、自ら出陣することを決意し、諸将に出撃を命じると、安土城を出て京へ向かったのです。

中国大返し

天正10年6月2日早晩。備中へ出撃したはずの明智光秀が突如軍勢を京へ向け、本能寺に信長を襲います。本能寺の変です。秀吉がこの情報を得たのは6月3日。秀吉は嚴重に情報を遮断した上で、安国寺恵瓊を呼び、和議交渉を急ぎます。領土割譲はともかく、清水宗治の切腹だけは譲れないと迫りました。恵瓊は、まず高松城の宗治を訪ねて事情を語り、主家の所領確保及び城兵の命の代わりに喜んで腹を切るという宗治の意向を受け取ってから、毛利本陣に向い、あわただしく和議をまとめたのでした。そして翌4日、清水

宗治は、船で高松城を漕ぎ出すと、検使の前で腹を切りました。これをゆっくり見届けて後、秀吉はすみやかに陣を引き払うと姫路城への道をわずか4日で駆け抜けます。そして12日、山崎にて明智光秀を破り、信長の敵討ちを果たしたのでした。

毛利方は、秀吉が撤退した後になって本能寺の変を知りましたが、追撃を主張する吉川元春らを小早川隆景が説得し、結局追撃しませんでした。しかし、これによって好感を持った秀吉は、後に豊臣政権において五大老に毛利輝元と小早川隆景の2名を入れるなど、毛利を厚遇したため、長期的には、毛利の戦略目的は果たされたといえるでしょう。

現在の備中高松城

近年、「蛙が鼻築堤跡」としてわずかに残された堤防跡で発掘調査が行われ、基底部の杭列等が実際に確認されており、現在レプリカ展示されているようです。また、高松城址公園には、周囲の沼が一部再現されています。まったくの平城で、城跡と言われてもぴんと来ないかも知れませんが、それだけに、水攻めですっかり水没してしまう城であったことがよく分かります。城というより地形を見ていただきたい歴史スポットの一つです。